

随想

我慢できない現代人

豊かさに慣れたわがままな個性が日本人に定着したのか

(株)P.P.Q.C 研究所 加藤 宏光

八月二十五日、テレビ朝日の朝のニュース番組(羽鳥慎一モニングショー)で《急増中「近所の騒音」どうやって身を守る?》とのタイトルで騒音トラブルについての報道があった。騒音の種類にはさまざまあり、とくに取り上げられたのは《騒音トラブルがもとで、近所の男性を車で引き殺そうとした六五歳の女性が逮捕されたというニュース》である。

この騒動をもとに、近年の騒音に対する一般人の不快感が(騒音公害について)うんぬんされていた。近隣住人のクレームを避けるために、《無音盆踊り》(踊る人々はイヤホンを付け、音頭はイヤホンを介してそれぞれにだけ聞こえるため、会場は音

楽なしである)、《無音太鼓》(太鼓をたたいても音が出ない)エアドラムというそうなの等、基本的には無音の中で祭りの参加者は黙々と踊っているのである。この無音盆踊りはもう二三年続いているという。それに慣れた人々に対してもしささかならずあきれられる思いがするのは著者のみであろうか?!

すでに一〇年以上も過ぎたので、記憶が定かでない方も多いたとは思うが、平群(へぐり)騒音おぼさん事件という騒動があった。平群町では、この事件をキッカケとして騒音防止に関する条例が制定されたのだそうである。条例によれば、七〇デシベル以上の騒音を出すことは条例の制限に引っ掛かるという。

七〇デシベルとは二倍離れたところで聞くセミの声だそうだ。セミといってもニイニイゼミやヒゲラシ、ハルゼミのようなセミではないだろう。クマゼミ、アブラゼミといった、いかにも騒々しいモノでなければ、耳障りにはなるまい。また、騒音公害といえば、最近では《子供を叱る親の声》ですら騒音公害に含まれる、とコメンテーターが言う。われわれ、戦中・戦後生まれ世代では及びもつかない感性である。この番組で語られる雰囲気からして、羽鳥アナウンサーをはじめとするコメンテーター諸氏は基本的には騒音公害は厳然とした社会問題である、という姿勢と受け止められた(騒音公害を認めるコメンテーター

||長嶋一茂、玉川徹、吉永みち子、および東大卒で行列のできる法律事務所出演でよく知られた住田裕子弁護士)。論調としては、被害者は騒音公害を受けている被害者として、裁判に訴えるのを是としている。個人の方については是非を問うのは、野暮というものかもしれない。しかし、「周りのヒトがすべて自分の思う範囲で行動して当たり前。そうでなければ裁判だ!」というのもどうかと思う(そうした意味で、マスコミの報道でこのような論調はいかなるものであろうか?)。

佐藤愛子氏の著書に『人間の煩惱』というものがある(二〇一六年、幻冬舎より出版)。佐藤愛子氏が幻冬舎から出版した

過去の作品から、佐藤愛子氏が自選したエッセイ、小説より抜粋してまとめたエッセイ集である。九〇歳の佐藤愛子氏の生きざまや人生観が盛り込まれていて、流し読みしても面白い。さすがに九〇歳の経験ベースに記述される内容は広汎であるが、その中に《第四章 子供とは我慢ができない子供の将来は...》があるので、この部分を引用してみよう。

「日本人は、今は好き放題贅沢をしているけれど、今にどんな時代が来るか。やがては食糧難の時代が来ることは目に見えている。その時に困るのは贅沢に慣れた者たちだ。どんな時代が来ても、どんな境遇になっても、嘆かず騒がず順応出来る人間に育てておくのが親の責任ではないか。子供が欲しいといっても簡単に与えず、我慢させる。我慢の力があるかないかで、その者の人生が決まるのだ...」(『不敵雑記たしなみなし』)

我慢ができなくなるのだろう。『わかる、わかるけど...』というヘッピー腰の教育、今風というところ、『思いやり教育』がすぐキレル若者を作ったのだ(『わが孫育て』)

ザツと読めば、もっともらしく受け止められよう。しかし、著書には違和感を否定できない。テレビ朝日がこの報道を企画した要因は《隣人の騒音にキレた女性の車による殺人未遂事件》であったが、逮捕されたのは六五歳の女性である。若者ではない。平群の騒音おぼさんも若者というにはかなりの年齢である。そうだとすれば、キレルのは若者の特徴とはいえない。若者に限らず、今の人々に我慢ができない個性が定着してしまっているとしたら、日本全体の深刻な問題であろう。

高年齢者をも含むすべての年代で我慢できないヒトが増えていること自体、どうして? である。もし、我慢ができないヒトが増えているなら、そうした人々は「自分の思い(欲望)がかなって当たり前」と信じているからとしか思えない。六〇年以上遠い昔となってしまった著者の子供時代には、日本はまだまだ貧しく、大人にとっても子供にとっても物質的には望んでも届かないことばかりであった。我慢が当たり前前の社会が当然であった。自分自身でも、欲求を精神的な満足に置き換えていたように感じる。